

石見海域漁場保全調査(食中毒原因細菌調査)

(漁場保全対策推進調査事業)

石原成嗣・井岡 久・開内 洋

1. 研究目的

腸炎ビブリオによる細菌性食中毒の発生件数は、戦後、安全衛生管理に対する各方面での取り組みにより減少する傾向であったが、ここ数年の食中毒発生件数の第1位になるなど増加傾向にある。それを受け、島根県下では各港で殺菌冷海水装置を導入するなどの試みが行われている。

今回、当該菌による漁獲物の汚染対策の一資料とすべく、石見海域の沿岸部における、腸炎ビブリオの発生状況を調査した。

2. 研究方法

試験船「明風」により、浜田・江津・温泉津沖1~3kmの沿岸海域の表層海水を1ℓ採取した。

海水は試験場に直ちに搬入後、速やかにフィルターで濾過を行った。濾過済みのフィルターを100mlのアルカリペプトン水に投入し8時間培養、その後食塩ポリミキシンブイオンに移植して18時間培養後、クロモアガービブリオ培地上で画線培養を18時間行った。そして培地上に現れた紺色コロニーのうち、①オキシダーゼテストが陽性、②0・10%食塩加ブイオンで生育せず、③3・8%食塩加ブイオンでの生育が確認できるもの、③TSI寒天培地で斜面が赤色で高層が黄色となるものを腸炎ビブリオ陽性とみなした。

また、6月と7月には一般生菌数も測定した。フィルターで100ml分集菌した後、標準寒天培地上で培養して、現れたコロニー数を計測した。

3. 研究結果

	腸炎ビブリオ			一般生菌数		
	浜田沖	江津沖	温泉津沖	浜田沖	江津沖	温泉津沖
6月26日	陰性	陰性	陰性	6200	2300	3000
7月8日	陰性	陰性	陰性			
7月29日	陰性	陰性	陰性			
9月9日	陰性	陰性	陰性	12200	5100	3000

4. 研究成果

- 島根県沿岸の腸炎ビブリオ発生状況を把握することで、今後の水産物の衛生管理対策への手がかりの端緒となりうるか、その評価も兼ねて実施した。沖合では腸炎ビブリオは検出されず、今後の海産物品質維持のための、重要な情報になると考えられた。
- より精度の高い調査とするためには、耐熱性溶血毒産生株の定量も考慮する必要がある。